スペインこぼれ話

平成25年2月 在スペイン大使館

1 総論

(1) 先進的な欧州主要国スペイン

スペインは、EU内第5位の人口規模(約4,70 2万人:2010年1月現在)、EU内第2位の面積 (約506,000km²:日本の1.3倍)、EU内 第5位の経済規模(GDP:約1兆4100億ドル: 世界第12位)を誇る、欧州5大国の一つである。また、かつてスペインの植民地であり、近年ではスペイン企業が多く進出している中南米諸国、及び歴史的・地理的に密接である地中海諸国(北アフリカ、中東)



とも関係が深い。政府開発援助は2009年時点では日本に次いで世界第6位であったが、2011年は財政削減の影響を受け11位の予想。

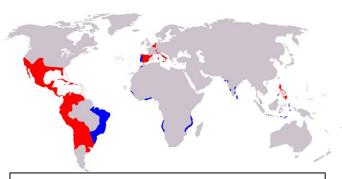
近年では<u>グローバルに事業を展開する大企業</u>も増えてきており、金融(サンタンデール銀行(分野別世界順位第13位))、通信(テレフォニカ:同第5位))、電力(エンデサ(同第2位)、イベルドローラ(同第6位)、アパレル(「ZARA」等を有する INDITEX 社(84か国に5,618店舗)の創業者アマンシオ・オルテガ氏は世界長者番付第3位、イスラ現会長兼CEOはスペインで最高報酬者(2,180万€))、インフラ等の分野



での活躍がめざましい。 <u>鉄道</u>分野においては、路線網及び技術力(路線建設・車輌製造)において世界でもトップクラスと言われており、現在の高速鉄道(時速 $250\,\mathrm{km}/\mathrm{h}$ 以上)の総延長距離(2、144km)は、中国(6、403km)、日本(2、664km)についで世界第3位である。

(2)太陽の沈まぬ帝国スペイン

スペインはかつて, 自国領のある場所で 太陽が沈んでいても、別の場所(植民地)



黄金の世紀 (1580~1640年) におけるスペイン帝国 (赤はスペイン王国、青はポルトガル王国) の領土、植民地、属領

では太陽が出ている」ということと、「繁栄している」ということを掛けて、「太陽の沈まぬ帝国」と呼ばれ、世界全体に植民地を有していた帝国であった。スペイン人の高い自尊心は、こうした歴史とも無関係ではないと言えよう。

スペインは、1580年から1640年にかけてポルトガル王位を兼ね、ヨーロッパ大陸ではオランダや南イタリアなどを属領とし、中南米やフィリピン(「フィリピン」とは後にフェリペ2世となる当時のフェリペ皇太子の名に由来する)、マカオ、マラッカ、ゴアおよびアフリカ大陸沿岸などの旧ポルトガル領などの海外植民地を得た。これら本国、植民地、属領の総称としてスペイン帝国と呼ばれた。

フェリペ2世の在位中(在位:1556~1598年)に最盛期を迎えるが、 1588年の無敵艦隊の壊滅を契機としてその勢力は下り坂に入り、30年戦争でスペインから独立したオランダや宿敵ブルボン家を擁するフランス、無敵艦隊を破ったイングランドなどの台頭もあって、その後衰退した。

(3) 我が国の皇室との交流が深いスペイン王室

我が国皇室とスペイン王室との間に緊密な交流が存在している。天皇陛下は4回、皇太子殿下は5回、これまでスペインをご訪問された。フアン・カルロス国王陛下(75歳)は新婚旅行を含め7回、フェリペ皇太子殿下は3回訪日された。最近では、2008年のサラゴサ万博の機会に徳仁皇太子殿下が訪西され、同年フアン・カルロス国王同王妃両陛下が国賓として訪日した。

万博の機会に徳仁皇太子殿下が訪西され、同年ファン・カルロス国王同王妃両陛下が国賓として訪日した。
ファン・カルロス国王は、1975年、フランコ総統

死後に国王として即位し、その後のスペイン民主化の過程において大きな役割
を果たした。特に、1981年の一部軍部によるクーデター未遂事件に際して

たこともあり、国民から大きな信頼を得ることとなっ た。

国王同王妃両陛下の間には、フェリペ皇太子殿下(45歳)、エレナ王女殿下(49歳)、クリスティーナ王 女殿下(47歳)がいる。フェリペ皇太子殿下は、2004年にジャーナリスト出身のレティシア現皇太子 妃(40歳)とご成婚され、2女をもうけている(レオノール:7歳、ソフィア:5歳)。エレナ王女殿下は、



フェリペ皇太子殿下とレティシア皇太子妃殿下

2010年にマリチャラール氏との協議離婚をしている(両者の間には2子)。

は、テレビ演説を通じて民主制度の擁護を唱えてクーデターを未遂に終わらせ

クリスティーナ王女殿下は元ハンドボールのスター選手(オリンピックに3度 出場)のウルダンガリン氏と1997年にご成婚したが(パルマ・デ・マジョ ルカ公爵となる)、同公爵は現在、公金横領事件の容疑をかけられ、裁判中であ る。

なお、昨年4月、フアン・カルロス国王陛下が、事前に公表することなくボッワナにおける象狩りツアーに参加し、大腿骨を骨折する事故を起こした(飛行機でスペインに緊急輸送され病院にて手術)ことに対し、国民が経済危機下に苦しむ中で理解に苦しむ行為であるとして、多くの非難が寄せられた。国王陛下は退院時に、国王としては異例であるが、テレビカメラの前で自ら国民に対して謝罪を表明した。

(4)日本スペイン交流400周年

スペインは、我々日本人にとって多くの魅力を秘めた国であるが、スペインと日本の交流は、400年以上前にさかのぼる。15世紀末にコロンブスがアメリカ大陸に到達して以降、大航海時代が始まり、スペインは世界の覇権国として繁栄を遂げた。日本では、戦国時代を経て豊臣秀吉や徳川家康による国家統一が進められた時代である。1549年にフランシスコ・ザビエルが日本でキリスト教を布教するなど、スペインとの交流が始まり、1584年には九州のキリシタン大名が天正遣欧少年使節団をスペインに派遣した。

特に、<u>1613年(慶長18年10月</u>,支倉常長率いる慶長遣欧使節 団が仙台藩主伊達正宗の命を受け、大御所徳川家康の許可を得てスペインに向けて旅立った。一行は、約1年かかって太平洋と大西洋をわたり、スペイン国王フェリペ3世との謁見を果たした。これは、日本がスペインに派遣した最初の日本人公式使節であった。(支倉常長が滞在したスペイン南部セビリア近郊のコリア・デル・リオ市には「ハポン」(スペイン語で日本を意味)という姓を持つ人が600人以上住んでおり、支倉一行の末裔と考えられている。)



支倉常長

このような史実を踏まえて、2010年の両国首脳会談の合意に基づき、本2013年6月から2014年7月まで「日本スペイン交流400周年事業」を実施し、幅広い分野で日本とスペインとの友好と交流を深めることになった。期間中、政治・経済分野の要人往来に加え、スペイン各地で様々な日本紹介事業や日本との交流事業が行われる一方、日本各地でも同様にスペインとの文化・交流事業が企画されている。また、両国の皇太子殿下が交流年の名誉総裁に就任されることになっている。

(5)スペインの地方の多様性

フランコ時代(1939~75年)には、中央政権化が図られ、各地方の言葉は使用が禁止されたが、民主化以降は地方自治が尊重されている。カタルーニャ、バスク、ガリシア、バレアレス、バレンシアは、スペイン語以外に、それぞれ固有の言語を持ち、それぞれの地方においてはスペイン語とともに公用語となっている。マドリードにおいても、街中のATMの画面には、スペイン語に加え、それらの言語の選択肢が表示されることも珍しくない。

また、気候面でも海洋性気候の北部、地中海性気候の東部、大陸性気候の中部、南部及び亜熱帯気候のカナリア諸島と多様性が存在する。更に、ローマ時代、西ゴート時代、アラブ時代といった異なる文明の支配下にあったスペインでは、それぞれの文明の盛衰の痕跡が文化遺産として今も各地に残されている。

人種的には、地中海人種に属するイベロ人が原住民と言われているが、フェニキア、ローマ、アラブといった血に加え、紀元前にイベリア半島に侵入したケルト人の北方系人種の血も混じっており、複雑である。スペイン人の顔つきや身体的特徴もこうした事情を反映している。

2 内政

(1)上下両院にて絶対過半数を有するラホイ政権

現ラホイ政権は、2011年11月に行われた総選挙の 結果、上下両院において絶対過半数を有する安定政権とし て誕生し、経済危機克服を最優先課題として掲げ、経済及 び欧州に知見のある実務者を中心とした内閣を発足させ た。財政改革,労働市場改革及び金融改革を中心課題とし, 政権発足以降各種改革を実施しているが、他方で、政策及 び公表経済数値の度重なる修正、欧州からの支援の見返り



として要求されている厳しい緊縮等の実施、更には諸改革を通じて国民に負担 を強いる一方で改革の成果が見えてこないという状況の中で、同政権に対する 支持率は低下傾向にある(2013年2月現在、ラホイ首相に対する支持率は 19%で、与党民衆党(PP)に対する支持率は23.9%。他方、最大野党 である社会労働者党(PSOE)の支持率も23.5%と低迷。)。2012年 10月21日の行われたガリシア州及びバスク州地方議会選挙は、ラホイ政権 のこれまでの経済政策、地方自治政策に対する国民の評価を見る上でも注目さ れ、結果、ガリシア州でPPが票数を伸ばし絶対過半数をより安定的なものと し、バスク州では民族主義勢力が票を伸ばし、PPは第4位にとどまった。

政権発足から1年を経過した同政権の目下の課題は経済危機からの脱却であ るが、カタルーニャ州における独立に向けた動きに対する対応等も今後の課題。

(2)ラホイ首相の横顔

現在57歳。ガリシア州議会議員、同州副知事等を経て、中央政 界ではアスナール政権下において、副首相、公共行政大臣、教育・ 文化大臣、首相府大臣及び内務大臣を歴任。2003年、アスナー ル首相(当時)から後継者候補に指名され,04年及び08年の総 選挙に首相候補として臨んだが、いずれもサパテロ社会労働者党候 補に敗北。11年の総選挙において「3度目の正直」として当選し ロンドン五輪サッカー代表を激励



た。自身が信頼を置く少数側近との協議により政策決定を行う傾向がある。メ ディア対応は得意ではなく、サエンス・デ・サンタマリア副首相兼首相府大臣 兼政府スポークスマン(女性、41歳)が主にメディア対応を担当している。 このことに関し、首相自らメディアを通じて国民に対して政策説明をすべきと の意見も聞かれる。趣味はスポーツ観戦、読書、釣り、サイクリング。なお、 政治家に転身する前には、スペインにおいて最も難関な国家試験といわれてい る不動産登記官に史上最年少(24歳)で合格し、同登記官として活躍していた。同首相の父親は判事で、兄弟は4人(2人は不動産登記官、残る1人は公証人(同様に難関国家試験))。



サエンス・デ・サンタマリア副首相

マドリード

(3)領土問題

(ア)アフリカ大陸に位置するスペイン領セウタ及びメリリャ

スペインは対岸のアフリカ大陸にセウタ(面積20km²,人口約78,000人)及びメリリャ(面積12km²,人口約69,000人)という2つの飛び地を有している。セウタは1415年にポルトガル領となり、1580年のスペイン王フェリペ2世のポルトガル王位即位以降スペイン領、メリリャは1497年にキリスト教勢力による国土回復運動(レコンキスタ)の余勢を駆って城塞を築いて以降、スペイン領となっている。

他方,両市についてはモロッコも領有権を主張しており,200 2年にはセウタのペレヒル島をモロッコ軍が占拠し,スペインが 軍事的な対応をするなどの事件が発生した。



ジブラルタルは、地中海と太平洋との間に位置するジブラルタル海峡につきだした要衝(面積 6. 5 km^2 、人口約 2 7、 0 0 0人)。 7 1 1 年にイベリア半島に侵入したタリクにより「タリクの山($Jabal\ Tariq$ (シューシ)」と名付けられ、その後訛りジブラルタル(Gibraltar)となった。スペイン継承戦争(1 7 0 0

~14年)を終結させるためのユトレヒト条約の締結により英領となった。スペインはジブラルタルを自国領と主張しており、



ジブラルタルから望むアフリカ大陸

1984年の「ブリュッセル・プロセス」(統治権や協力分野を協議する場)により、断続的に両国間で共同統治等について協議されているものの、2002年にジブラルタルで行われた両国の共同統治の是非を問う住民投票では、99%が反対票を投じ、引き続き英国による統治を望む意思を表明した。

なお、同地に生息する猿は9世紀にアラブ人が持ち込んだといわれており、 「岩山に猿がいる限りイギリスの統治が続く」との言い伝えもある。

3 経済

(1)厳しい経済危機

スペイン経済は、1986年のEU加盟から1999年のユーロ導入を経て2008年のリーマン・ショックまで好調を維持、20年間でGDPは約3倍に拡大し国民生活も大きく改善した。しかし、2008年以降、景気低迷による財政赤字の拡大、不動産バブル崩壊による金融機関の



破綻、ユーロ危機に伴う国債リファイナンスの困難等に直面し、失業も深刻化。

経済危機の中で2011年11月に発足したラホイ政権は、財政赤字削減(歳 出削減と増税)、金融改革(金融機関再編と不良債権処理)、労働市場改革(解 雇コストの低下と若年労働者の雇用促進)、医療・教育・年金・地方財政等の制 度改革に積極的に取り組んでいる。

国債市場における金利は2012年中頃の状況(10年債利回り7%台後半)に比べ一定の落ち着きを見せているが(13年1月現在,10年債利回りは5%前後,リスク・プレミアムは350bp前後),依然高いレベルではあり,また,ユーロ圏全体の銀行同盟や財政統合などの改革措置がなかなか進まない中で、厳しい経済運営を迫られている。

(2)高い失業率

スペイン経済にとって深刻な問題は景気の牽引役が見当たらないことである。<u>失業率は26.02%(2012年第4四半期)</u>まで上昇しており(597万人)、特に<u>若年層(16~24歳)の失業率は55.13%</u>に達している。一方で、他の欧州諸国で見られるような暴動等が当地で起こらないのは、地下経済(報じられているところではGDPの20%



職業紹介事務所の前に並ぶ失業者

程度に相当)の存在、血縁、地縁による相互扶助関係、15年続いた好況期の 蓄え等が挙げられる。

なお、スペインの失業率が高い背景として、600万人(人口の12%)にのぼる外国人労働者やアルバイト的に働く主婦労働者の存在、年休受給資格発生の2年前から失業手当で生活したり、失業手当を受給しつつ地下経済で働いたりする慣行等が指摘されている。また、勤続年数の長い労働者ほど解雇コストが高いなどの労働市場の硬直性が若年層の高い失業率に繋がっている。本年

2月, 抜本的な労働改革が行われたが、まだその効果が出てくるまでには至っていない。

(3)日スペイン経済関係

日本とスペインの貿易総額は5,200億円(2011年)で、2008年の経済危機以降、日本からの輸出は半分以下に減少した一方、スペインからの輸出は増加傾向にある。2011年の日本からの輸出は2,500億円で、主な輸出品は、自動車、加冷用・冷却用機器、映像機器となっている。スペインから輸出は2,700億円で、主な輸出品は、有機化合物、医療品、バッグとなっている。なお、2012年の統計はスペイン側の出超となった。

投資について見ると、2011年の直接投資残高は日本からの投資が1,176億円、スペインからの投資が295億円となっている。日本からスペインへの進出企業は、家電、自動車、化学、機械、金融など225社で、スペインから日本への進出企業は、食品・飲料、アパレル、陶器、金融など36社。

観光交流としては、日本からは2011年で33万4千人の旅行者が訪西しており、2008年の経済危機後の落ち込みから回復しつつある。

スペインからの訪日旅行者数は、絶対数は少ないものの、日本への関心の高まりを反映して一貫して増加傾向にあり、2010年で過去最高の4万4千人を記録したが、2011年は東日本大震災を受け2万1千人へと激減した。2012年は回復基調にあった(2012年の年間の数字は未集計)。

(4)日西企業協業

スペインには世界をリードする大企業(金融、エネルギー、通信、インフラ、アパレル)が存在しているが、近年では、アンダルシア州やエストレマドゥーラ州での太陽熱発電のプロジェクトを日西間の合弁で進めるなど、特に再生可能エネルギー分野において日西企業間協力が進んでいる。

スペイン企業は国内及び欧州の経済危機を背景に、中南米やアジア等の新興国においてのオペレーションを拡大しようとしており、既にインフラ、通信、エネルギー分野等でこれら地域における日西企業協力の事例が見られるところ、今後、更なる関係強化が期待されている。その一環として、長年休眠状態にあった両国ビジネス界交流の場である日西経済合同委員会が活性化されつつあり、明年マドリードで再開会合を行う方向で調整が進んでいる。

4 科学技術

<u>(1)スマート・コミュニティに関す</u>る日西協力

アンダルシア州マラガ市では、地域の発電施設や蓄電施設、スマート・ビルディングやスマート・メーターを情報技術を用いて結びつけることで地域のエネルギーの最適な管理を目指す「スマート・シティ・マラガプロジェクト」が推進されている。これと連携する形で、NEDO(独立行政法人新エネルギー・産業技術総合開発機構)により、



マラガで使われる電気自動車

電気自動車導入等に関する「スマート・コミュニティ実証事業」が進められている。(2012年~16年、事業規模50億円)

具体的には、市内にEV(電気自動車)の充電施設を配置し、EV使用者の 走行履歴や充電地点誘導などの行動変革を計算しデータを蓄積することで、E V使用者、充電施設設置者、電力事業者などのステークホルダーを調整する事 業の可能性を実証していくことになる。

本事業は、NEDOの委託のもと、日西企業間の共同プロジェクトとして行われ、日本側から三菱重工、日立、三菱商事、スペイン側からエンデサ、テレフォニカ、サディエルが参加している。

(2)科学技術協力協定

スペインでは、特に<u>風力発電や太陽熱発電</u>等、広大な大地と晴天の多い気候を利用した<u>再生可能エネルギー</u>の導入や実証研究が進んでいる。日本との間では、科学技術分野での協力を進めていくため、2011年に<u>科学技術協力協定</u>を締結し、2012年7月に第1回合同委員会を開催したところであり、今後、再生可能エネルギーやスマートコミュニティ、核融合研究等の分野において、両国の研究機関の間で協力・連携を進めていく予定となっている。



5 社会

(1) 少子化

スペインは日本と同様に最も少子化が進んでいる国の一つである。2010年の合計特殊出生率(一人の女性が一生に生む子供の平均数)は日本が1.39、スペインは1.38となっている。スペインにおける少子化の要因としては、女性の第1子出産年齢の上昇(2011年時点で31.43歳と史上最高を記録)、



夫婦共働きの増加等により出生率は低下

安定した職業に就くまで出産を控えていること、景気後退期において夫婦共働きが増加していることが挙げられる。

(2)臓器移植先進国

スペインは、人口あたりの臓器移植件数が世界で最も多く、これは、先進的な全国移植コーディネーション制度や高い技術にも支えられている。また、スペイン人が好んで使う「連帯(solidaridad)」の精神に起因するとも言われている他、スペインでは事故死した場合には事前に臓器移植を拒否する届出をしていない限り、原則として全員移植の対象となる法制にも支えられている(ただし、実際には、家族の承認を求めることが通例であるが、家族が反対する場合であっても、最終的に臓器摘出を行っても違法とはならない)。2011年の臓器移植件数は4、218件(同年の日本での件数は329件。)。

(3) 若者の生活事情

スペイン人の20~29歳のうちの約7割が親と同居しているといわれ、<u>実家を離れる年齢は平均29歳</u>(フィンランドは平均23歳)との統計がある。これは、家族のつながりが強いという伝統的な特性に加え、若年層の失業率が53%にも上る中で、実家が経済的にも精神的にも支えになっているとの見方がある。

こうした中、外国に就職機会を求めることを真剣に検討する若者が急増して おり、技術を有する者も含め、実際に欧州諸国を中心に職を求める傾向が強く なっており、このことが将来的には頭脳流出に繋がるのではないかとの懸念も 指摘されている。

6 文化

(1)フラメンコ 「日本は本国スペインに次ぐフラメンコ大国」

南部のアンダルシア地方を発祥の地とするフラメンコ舞踊は、ギターの音に合わせて唄う素朴なジプシーの民謡と動きの激しい踊りを特徴する。2010年、フラメンコはユネスコ無形文化遺産に指定された。

1932年(昭和7年)にテレジーナ・ボロナート舞踊公演(東京劇場)により日本に初めて紹介されて以降、フラメンコは日本



人の心をとらえ、日本は本場スペインに次ぐフラメンコ好きの国となっている。 日本にはフラメンコ教室が650以上、フラメンコ学習者は8万人以上いると 言われている。

最近は、単なる趣味にとどまらないレベルの向上がみられ、フラメンコの踊りだけでなく、カンテ(歌)、ギターの学習者も増加し、高いレベルを誇っている。スペイン国内で著名なコンクールで日本人フラメンコダンサー(バイラオーラ)やギタリストが優秀な成績を収めるとともに、国内最大のフラメンコ・フェスティバルである「フラメンコ・ビエンナール」(セビリア)の他、国内各地のフラメンコ・フェスティバルに多くの日本人が出演し、高い評価を受けている。小松原庸子、小島章司等はスペインでもよく知られている。

<u>(2)闘牛「人間と猛牛の真剣勝負:スペインの華」</u>

サッカーにお株を奪われてきているとはいえ、闘牛は依然スペインを代表するスポーツとして根強い人気を保持している。抜けるような青空の下、強烈な日光を照り返す砂の上に展開される猛牛と人との闘争は、「スペインの華」と呼ばれるにふさわしい行事でありスペクタクルである。シーズンは3月中旬から10月上旬とされ、首都マドリードでは5月中旬のサン・イシドロ祭の期間がベストシーズン



となっている。観客席の値段は、列や日向/日陰によって分けられ、日陰の方 が料金が高い。

スペインの闘牛で活躍する正闘牛士(マタドール)は闘牛士全体の1割に満たず、残りは準闘牛士(ノビジェーロ)。日本人の闘牛愛好家も多く、また<u>これまで日本人闘牛士3名が活躍した</u>(ウエルバ在住の濃野平(Nono Taira)、El Terremoto de Japón と呼ばれた山中正志(Masashi Yamanaka) と El Nino del sol

naciente と呼ばれた下山敦弘(Atsuhiro Shimoyama)なお現役は濃野氏のみ)。 闘牛の文化は、スペインでも賛否両論あり、1991年にカナリア諸島で初 の闘牛禁止法が成立。その後、2010年にはカタルーニャ州で闘牛禁止法が 成立し、2012年から州内での闘牛が禁止されている。

(3)拡大するスペイン語人口

スペイン語は、スペイン、中南米18ヶ国及びアフリカの赤道ギネアの<u>計20か国における公用語であり、また世界で約5億人</u>(米国におけるヒスパニック人口等を含む)が母国語としていると言われており、その数は中国語に次いで世界第2位。また、国連公用語の一つでもある。

スペイン語は、日本語と似て5つの母音からなる(「u」以外は日本語の母音とほぼ一緒)こともあり、日本人が馴染みやすい言語とも言われている。近年の日本におけるスペインブーム、中南米諸国の存在感の増大、更には米国におけるスペイン語人口の増大(5千万人以上がスペイン語を日常的に使用)もあり、我が国においてもスペイン語人気は高まっており、現在、日本においても40~50万人がスペイン語を学習しているとも言われている。

(4)スペインにおける日本語学習 「とどまること知らない日本

語学習熱」

近年における対日関心の増加、また漫画・アニメ等ポップカルチャーの影響を受け、多くの若者が日本語を学習している。現在スペインにおける日本語学習者は現在約4000人と言われ、日本語講座の開設数とともに年々増加を遂げている(国際交流基金調べ)。90年以降、国内各地の大学で日本語講座の開講が相次ぎ、現在18大学に日本語講座が設置されている他、公立語学学校4校においても日本語クラスが設置されている。

国際交流基金主催の日本語能力試験では、1997年の開始時の受験者数は205人であったが、2009年には936名と12年間で5倍近く増加している。日本語能力試験でスペインは、欧州でフランス、ドイツに次いで3番目の受験者数を誇っている。

(5)文化遺産 「世界遺産の宝庫 スペイン」

スペインのユネスコ世界遺産登録数は<u>現在44件</u>(文化39件・自然2件・複合2件)に上り、イタリア(4



西ゴート王国及びカスティーリャ王国の旧都トレド

7件)に次いで世界で2番目に世界遺産の登録数が多い(2012年3月時点)。 1984年以降、グラナダの歴史地区、グラナダのアルハンブラ宮殿、古都トレド、バルセロナのガウディ建築他がユネスコ世界遺産として登録されている。 なお、日本の世界遺産登録数は16件(文化12件・自然4件)で、世界で14位。

また、スペインのユネスコ無形文化遺産には12件、記憶遺産には2件が登録されている。無形文化遺産には「フラメンコ」(2010年)の他、食文化が無形文化遺産として始めて認められた「地中海料理」(2010年)等が登録されている。また記憶遺産には、ポルトガルとの間で新大陸の分割を取り極めた「トルデシーリャス条約」(2007年)他が登録されている。なお現在、2013年の支倉常長率いる慶長遣欧使節の派遣400周年の佳節に、日本とスペインの共同提案による慶長遣欧使節関連資料の記憶遺産登録が進められている。

(6)観光大国スペイン

豊かな自然、文化遺産、温暖な気候など、スペインには外国人を魅了する多くの観光資源がある。2011年にスペインを訪れた外国人旅行者の数は5,669万人(スペイン全人口4,700万人を上回る!)で、フランス、アメリカ、中国に次ぐ世界4位の訪問受入国となっている。(日本は東日本大震災前の2010年で811万人。)



アルハンブラ宮殿

外国人旅行者を居住地別に見ると、イギリス (1,361万人)、ドイツ (903万人)、フランス (849万人) からの来訪が多い。

また、主な目的地の別で見ると、首都マドリード(マドリード州を主たる目的地としているのは 461万人だが,他州訪問者の多くはマドリードも訪問)に加え,カタルーニャ州(1,377万人)、カナリア諸島(<math>1,018万人)、バレアレス諸島(<math>1,010万人)、アンダルシア州(<math>788万人)の順である。

このように大きな観光需要を受けて、観光は産業としても重要な位置を占めており、2010年のデータでは、<u>観光関連産業でスペインのGDPの10.</u> 2%、雇用の11.5%(211万人)を生み出している。

なお、経済情勢の悪化が報じられる中でも、2012年夏の外国人観光客の 来訪は好調で、7月は同月としての過去最高を記録したほか、8月と9月も前 年同月を上回った。

食文化

(1)グルメの国スペイン

スペイン料理としては、トルティージャ(スペイン風 オムレツ) や生ハムが有名であるが、地方により気候や 風土、文化、習慣が異なるため、地域毎に様々な伝統料 理が存在する。具体的には、北部のガリシア、バスク地 方では新鮮な魚介類を使用した料理やボリューム感の ある肉料理、アンダルシア地方ではガスパチョ(トマト ベースの冷たいスープ) や揚げ物料理、地中海沿いのバ レンシア地方ではパエリアなどが有名である。



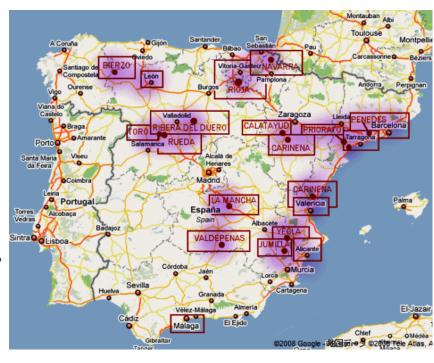
スペイン国民の料理に対する関心も高く、スペイン各

地で毎年多くのグルメイベントが開催されており、サンセバスティアンのグル メ博には日本人料理専門家も参加している。また世界最古のレストランと言わ れるマドリードの「エル・ボティン」他有名なレストランも数多くあり、特に カタルーニャ地方の「エル・ブジ」は常に斬新な料理を世界に発信し、世界一 予約が取れないレストランとして有名。(現在一時休業中。)

(2)人気上昇中のスペイン・ワイン

スペインの気候、土壌等は、ブ ドウの栽培に非常に適しており、 ワインの生産量は5.2億リット ル(世界第3位)と、質・量とも に世界屈指のワイン生産国であ る。近年日本では、スペインブー ムや比較的リーズナブルな価格 からスペインワインの人気が高 く、日本への輸出はここ10年で 3倍に増え1、370万リットル (2010年)が輸出されている。 (フランス、イタリア、チリに続 き、輸入先国として第4位(全体 の約10%)。)

スペインワインは、原産地呼称



制度により7つのカテゴリーに格付けされ、地域により多様な味わい・香りが楽しめることから、世界的にも幅広い人気を博している。特に評判が良いワインは、スペイン北部のリオハ(Rioja)産の赤ワイン、北中部のリベラ・デル・ドゥエロ(Ribera del Duero)地方のベガ・シシリア(Vega Sicilia)(スペインワインの至宝とも言われる「UNICO」等を生産)、北西部のガリシア(Galicia)地方のリベイロ(Ribeiro)産の白ワインなどが挙げられる。また、通常のワインの他にも、甘口から辛口まで揃った強化ワインであるシェリー酒(同酒産地のスペイン・アンダルシアのヘレス(xerez)が英語風に訛り sherry となったと言われている)、バルセロナ近郊で作られる発泡ワインである<u>カバ</u>は日本でも人気がある。

(3) 赤ワインによく合う生ハム

スペインでは伝統的に生ハムが多く生産されており、 イベリコ豚を使用したものは非常に美味である。中でも、 主にドングリを食べて育ったイベリコ豚を使用した生 ハムは、「ハモン・イベリコ・デ・ベジョータ」と呼ば れ高く評価されている。

スペインでの生ハムの生産量は約25万トン(200 9年)、2000年に日本への輸出が解禁されて以降、 日本でのイベリコ豚やバル人気等により対日輸出は 年々増加している。(2011年の輸出額:約9千万ユーロ。)

8 サッカー王国スペイン

サッカーはスペインの国民的スポーツであり、有名 選手は国民の憧れの的である。現在スペイン代表チー ムはFIFAランク1位(日本は21位)で、200 8年及び2012年の欧州杯で連続優勝という史上初 の偉業を成し遂げた他、2010年のワールドカップ でも優勝を果たすなど、最盛期にある。代表チームに



は、レアル・マドリード、FCバルセロナ等スペイン・リーグ(スペイン語で は「リーガ・エスパニョーラ(Liga Española)」) で活躍する選手の他、プレミア・ リーグ等外国プロリーグで活躍する選手が招集されている。

スペイン・リーグは1部と2部から成るプロリーグであり、レアル・マドリ ードやFCバルセロナが所属する1部には20チームが競い合う。上位1~2 位のチームは欧州クラブチーム選手権の最高峰といわれるチャンピオンズ・リ 一グに進出し、同3~4位のチームは他の欧州チームとの予選の結果次第で同 リーグに参加できる(同リーグに参加できない場合には<u>欧州リーグ</u>に回る。)<u>レ</u> アル・マドリードはチャンピオンズ・リーグ9度優勝(最多優勝)の名門であ り、FCバルセロナは4度優勝している(最近では2010-11年にも優勝)。 なお、チャンピオンズ・リーグの王者と欧州リーグの王者は欧州スーパーカッ プを目指して戦うこととなり、昨年の欧州スーパーカップは欧州リーグ王者の スペインのアトレティコ・デ・マドリードがチャンピオンズ・リーグ王者の英 国のチェルシーを破った。

なお、昨年のロンドン五輪においては、スペイン・サッカー代表は予選にお いて日本代表に0-1で敗北するなど振るわず、予選敗退という結果となった。

その他のスポーツ

サッカー以外にも、多くのスポーツ選手が世界的に活躍している。 代表例は以下の通りである。

- ・ハンドボール(世界選手権優勝(2013年))
- テニス(フェレール(ATP第4位)、ナダル(同5位)、アルマ グロ(同11位)(日本の錦織は同第21位)
- ・シンクロナイズドスイミング(ロンドン五輪デュオ銀メダル).
- ・バスケット(ロンドン五輪銀メダル,多くのNBA選手を輩出),
- ・水球(女子ロンドン五輪銀メダル)
- F1(アロンソは2005及び2006年チャンピオン、2012年第2位)



NBAレイカーズのガソル選手